『桜川』注釈（四）

吉田　健一・松本　麻子

キーワード＝『桜川』、俳諧、風虎、磐城、北村季吟

はじめに

磐城平藩藩主内藤義概（風虎）が、松山玖也に命じて編纂させた俳諧発句集『桜川』の注釈を掲載する。本稿は前号に続いて（四）として「春二」の冒頭句一三四九～一四〇六の注釈を行った。底本には大東急記念文庫本『桜川　上下巻』（加藤定彦解説、一九八五年、勉誠社）を用いた。翻刻にあたり、底本の旧漢字、異体字は現行の字体に改めた。底本で仮名書きとなっている言葉の一部を漢字に改め、統一されていない表記は歴史的仮名遣いにし、踊り字を平仮名に改め、濁点のないものは濁点を施した。これらを底本どおりに復元できるよう、本文に振り仮名で示した。また、底本の難読字には括弧付きで振り仮名を付けた。同様に、歴史的仮名遣いと異なる表記についても、括弧付きで通常の歴史的仮名遣いによる表記を示した。各句には連番で番号を付した。

引用した和歌と歌番号は『新編国歌大観』、『私家集大成』による。引用した俳諧の句番号は、古典ライブラリーのデータベース「日本文学Ｗｅｂ図書館」の中で使用されているものを付した。引用文献においても、一部平仮名を漢字に改め、踊り字を平仮名にし、濁点を補い、漢詩文には訓点を付した箇所がある。今回取り上げた句はすべて春の句であることから、季語については特に指摘しなかった。〔作者〕欄の作者名及び作者略歴については、前号に掲載された者は省略し、初出の者についてのみ記した。大東急記念文庫本『桜川　下巻』巻末の「作者索引」、角川書店『俳文学大辞典』、『誹家大系図　古風談林正風』（雲英末雄編、一九九七年、青裳堂書店、『誹家大系図』は大系図と略）、『寛文比誹諧（宗匠并素人）名誉人』（野間光辰、「連歌誹諧研究」十七、一九五八年十二月、名誉人と略）他を参照した。また、『桜川』に入集する句数を挙げた。句集『桜川』については大東急記念文庫本『桜川　下巻』の解説を参照されたい。本稿の注釈は吉田が担当し、松本が最終的な加筆・修正を行った。

〈桜川・春二〉

蕨

寛文七年未八月中旬

1349　早蕨や手折しおりを汁のつま　　**武野保俊**

〔句意〕手折った早蕨を、早速、汁のつまにしたことです。

〔解釈〕◇**寛文七年**　一六六七年。丁未。◇**早蕨**　芽を出したばかりの蕨。「石走る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかも」（万葉集・一四二二・志貴皇子）が名高い。句例に「折やつす山の早蕨たばねわけ」（犬子集・一六三五・徳元）、「早蕨や深谷の雪にふところ手」（玉海集・四〇二・貞室）、「早蕨や手ごとにさする山の腰」（毛吹草・七〇六・

定重）などがある。**◇手折しおり**　「手折る」は手で折ること。句例に、「居ずば出合へ手折るは知るな花の番（続山井・二〇五一・重実）、「女郎花手折るや破る邪婬戒」（玉海集・一六八四・重貞）などがある。「おり」は機会の意。早蕨を折った機会を利用して早速に、「汁のつま」を準備したのであろう。**◇つま**　料理に添えて出す海草や野菜のこと。本句では、早蕨の茎や葉を汁の具材、すなわち「汁のつま」にしたのであろう。これを使った句に「よめが萩や今日我が宿の汁のつま」（時勢粧・一六二・一志文幸）、「汁のつまや青葉交りの桜鯛」（続山井・二七八四・道之）などがある。

〔作者〕武野保俊（摂津・大坂）。五一句。

1350　**早蕨（さわらび）やもえてもかげの鞍馬（くらま）山**　　**尼ケ崎住雅伸**

〔句意〕早蕨が燃えているように萌え出ても、陰は暗い鞍馬山であることです。

〔解釈〕◇早蕨　一三四九参照。**◇もえても**　早蕨の新芽が「萌えても」に「燃えても」を掛ける。歌例に「石走る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかも」（万葉集・一四二二・志貴皇子）がある。句例に「早蕨のもえてやくろの焼き畠」（塵塚誹諧集・二六一・徳元）がある。この句も「萌え」と「燃え」を掛ける。**◇かげの**　早蕨が「燃え」ても「陰」となる、という言葉遊びと、「鞍馬」の縁で馬の「鹿毛」を掛ける。「陰」と「早蕨」を結んだ歌例に「折にあひて萌出でけらし山松の緑にけぶる陰の早蕨」（芳雲集・四三四）がある。同じ言い回しの歌の例に「飛ぶ蛍沢辺の水にうつればやもえても影の涼しかるらん」（題林愚抄・二四七一・小倉季雄）がある。句例には「早蕨の陰の小つつじ又をかし」（時勢粧・四四一八・一幸）がある。**◇鞍馬山**　現在の京都府京都市左京区にある山。「くら」は「暗」を掛ける。歌例に「鞍馬山暗く見ゆれど時鳥すかたらふ声を我と知しらずや」（夫木抄・八五六五・藤原清正）などがある。また、句例に「花の枝を折る人しばれ鞍馬山」（貞徳誹諧記・五七九・心和）、「花に風の手形はつけそ鞍馬山」（続山井・二一一〇・　如貞）などがある。

〔作者〕尼ケ崎住雅伸（摂津・大坂）。二六句。

1351　**陸奥（みちのく）表山と云ふ所にて**
早蕨や日表山を折り所（どころ）　　**平鹿貞臣**

〔句意〕陸奥表山という所で詠んだ句。早蕨が伸びています。日の当たる表山の折り返しのところを居場所にして。

〔解釈〕◇陸奥表山　現在の福島県いわき市好間町大利字表山か。**◇日表山**　「日表」は日の当たる側、ひなたの意。「日表山」は日の当たる表側の山のこと。「表山」という地名から思いついた表現であろう。「日表」の表現を用いた句例に「日表の花は日うらの雪見哉」（毛吹草・八一九・昌意）、「天照す日表や咲く伊勢桜」（同・八九八・同）がある。**◇折り所**　山を表山（日の当たる側）と裏山（日の当たらない側）とに分ける稜線のこと。「居り所」をかける。なお、「蕨」と「折る」は縁語。句例に「扇こそ目にみぬ風の居り所」（崑山集・四二五九・未得）、「居り所定めぬ宵の涼みかな」（曠野後集・二三一・歌的）などがある。いずれも「居り所」の句例で、「折り所」の句例は見出せない。

〔作者〕平鹿貞臣（陸奥・岩城）。七句。

1352　**萌え出づる日表山や初蕨（はつわらび）**　　**小川繁昌**

〔句意〕草木の芽が萌え出る日の当たる日表山に、今年最初の蕨が伸びていることです。

〔解釈〕◇萌え出づる　草木の芽が出ること。歌例に、「石走る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかも」（万葉集・一四二二・志貴皇

子)、「萌え出づる木の芽を見ても音をぞ泣くかれにし枝の春を知らねば」(後撰集・一四・兼覧王女)などがある。また、句例に、「萌え出づるは竹のわりひの蛍かな」(崑山集・三二八六・久勝)、「萌え出づる観音草や娑婆示現」(続山井・二五一二・以隠)などがある。**◇日表山**　一三五一参照。**◇初蕨**　最初に芽生えた蕨。「萌え出づる」と結んだ句に、「萌え出づる蕨を消すな春の雨」(犬子集・五四九・俊英)、「左義長かはやせ萌え出る初蕨」(崑山集・一二一三・吉任)などがある。

〔作者〕小川繁昌(陸奥・岩城)。一四句。

1353　**同灰作と云ふ所にて**
紫の灰作焼くや初蕨　　**風山**

〔句意〕同じく陸奥の灰作という所で詠んだ句。紫がかった灰ではないが、灰作の原で紫色の蕨を焼いているのでしょうか。

〔解釈〕◇灰作と云ふ所　現在の福島県双葉郡広野町折木字灰作か。**◇紫**　灰の色をいう。「紫」と「灰」を結んだ歌例に、「紫は灰さすものぞ海石榴の八十の衢に逢へる児や誰」(万葉集・三一一五)があり、本歌と見られる。「紫の灰さす」を「紫の灰作」とした詞遊び。また、「紫」と「蕨」を結ぶ歌例には、「武蔵野にことはおひなん紫の蕨は草のゆかりと思はん」(堀川百首・一四四・河内)などがある。和漢朗詠集にも「紫塵の嫩き蕨は人手を拳る、碧玉の寒き蘆は錐嚢を脱す」(巻上・一二・小野篁)と見える。句例にも、やや時代が下るが、「紫の鎰見出したる蕨かな」(曠野後集・四三・荷兮)などがある。**◇灰作焼くや**　灰作で焼いているのか、の意。「灰作」という地名から「焼く」を想起し、紫意の蕨を灰作で焼いているのか、の意となる。「灰」は「焼く」の縁語。**◇焼くや**　歌例に「来ぬ人をまつほの浦の夕凪に焼くや藻塩の身もこがれつつ」(新勅撰集・八四九・藤原定家)がある。句例に、「かはらけで焼くや深草の鶉餅」(崑山集・五〇九一・長頭丸)、「焼くや身もこがるる色ぞ紅葉鮒」(続山井・四九九〇・義文)、「かまぼこに焼くや火花の桜鯛」(ゆめみ草・八一七・重茂)などがある。**◇初蕨**　一三五二参照。

〔作者〕風山(陸奥・岩城)。一〇〇句。風山は風虎別号。

1354　**折りえてもてにはのなきや若蕨**　　**名古屋住宗清**

〔句意〕機会を得て折りとることができても、まだ形になっていないようです、若い蕨は。

〔解釈〕◇折りえても　折ることができても、の意。また、折を得て、の意も掛け、「折をえて若蕨を折ることができても」の意となるか。「折えても心ゆるすな山桜さそふ嵐のありもこそすれ」(新続古今集・八二二・仏国禅師)は前者の意で、「花は過ぎ紅葉はまだき夏山に折えてもなく時鳥かな」(清輔朝臣家歌合・二〇・顕昭)は後者の意の歌例。また、前者の句例に「折えぬは泥水に絵や杜若」(ゆめみ草・九四一・望一)などがある。**◇てには**　「てにをは」のこと。てにはのなき、は完成していない、整っていない、の意。句例に「てにはもなし風情ばかりに置く扇」(江戸通り町・一六八・蝶々子)がある。**◇若蕨**　生えてまもない蕨。句例に「孫の手やうしろの山の若蕨」(江戸蛇之酢・一二六・貞政)がある。

〔作者〕名古屋住宗清(尾張・名古屋)。一句。

1355　**落葉かく蛛手か松の下蕨**　　**石倉一入子**

〔句意〕落葉を掻く蛛手でしょうか、松の下に生えている蕨は。

〔解釈〕◇落葉かく　落ち葉をかき集めること。歌例に、「落葉かく程なりけりな吹く風のひまにもそよぐ森の下道」(為尹千首・五二〇)、「里の子の落葉かくてふ出入に煙をたたぬ松の下庵」(正広集　七二〇)などがある。句例に「落葉かく童部は風の小春かな」(時勢粧・一四五〇・月

清)、「菜刀や落葉かくなる鍋の尻」(洛陽集・九九七・信就)などがある。**◇蛛手**　熊手のこと。句例に「ゆく雁や蛛手かくなは十文字」(崑山集・五一五〇・伊誰)、「行く水の蜘手にとぼせ蛍の火」(続山井・三六五二・宗知)などがある。**◇下蕨**　木の下に生えている蕨。歌例に「深山木の陰野の下の下蕨もえいづれども知る人もなし」(千載集・三四・藤原基俊)がある。句例に「石風呂をたくか岩尾の下蕨」(崑山集・一二一七・俊寿)、「手をだすなこぶしの花の下蕨」(同・一二二八・同)などがある。

〔作者〕石倉一入子(紀伊・長島)。一四句。

1356　**忘(わす)れては指(ゆび)かとぞ思(おも)ふ蕨の手**　　**若原叩端**

〔句意〕忘れていましたので、「夢」ではなく「指」かと思ってしまいました。手によく似た蕨を。

〔解釈〕◇忘れては　歌例に「忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは」(古今集・九七〇・在原業平)があり、本歌となる。「夢」かと思ったと詠む業平の歌を踏まえ、「指」かと思ったとした。同じくこの歌を本歌とする句に「忘れては君かとぞ思ふ雪女」(崑山集・七一五七・幾成)、「忘れては弓かとぞ思ふ小野の月」(毛吹草・一七二八・昌意)がある。**◇指**　「蕨」と結んだ句例に「酒樽を指立ててまく蕨縄」(塵塚誹諧集・六三八・徳元)、「指す手ひく手を折らまほしきやかぎ蕨」(続山井・二五五五・如水)などがある。**◇蕨の手**　こぶしの形をした蕨の新芽を手に見立てた。句例に「肩先をもむか岩尾の蕨の手」(崑山集・一二一八・長昌)、「手のひらはなしやあやしな蕨の手」(同・七六五四・幸以)などがある。

〔作者〕若原叩端(尾張・熱田)。二句。

1357　**折る人の顔(かほ)や春野の蕨(わらび)の手**　　**川窪信則**

〔句意〕折る人の顔は笑顔になるでしょうか、春野の、手のような蕨は。

〔解釈〕◇折る人の　蕨を手折る人。この表現を用いた歌例に「折る人のそれなるからにあぢきなく見し我が宿の花の香ぞする」(新古今集・一四五九・和泉式部)、「雪ふれば草木になべて折る人の衣手さむき花ぞさきける(貫之集・四九五)などがある。また、句例に「折る人の帰るも花のしるべかな」(大発句帳・一三八一・宗祇)、「花の枝を折る人しばれ鞍馬山」(貞徳誹諧記・五七九・心和)などがある。**◇春野**　春の野原のこと。「春」に「晴」を掛け、顔が晴れるの意もあるか。歌例に「紫の根ばふよこ野の春野には君をかけつつ鶯鳴くも」(万葉集・一八二五・柿本人麻呂)、「小萩つむ春野を見ればあをによきならの都もにぎはひにけり」(新撰六帖・二一四五・葉室光俊)、などがあり、また句例に「雲雀毛の駒もとび立つ春野かな」(続山井・二七〇〇・正好)などがある。**◇蕨の手**　一三五六参照。「蕨」は「笑ひ」を掛けるか。

〔作者〕川窪信則(武蔵・江戸)。四句。

1358　**蕨手の幾劫経てや切返し**　　**常用由可**

〔句意〕蕨の新芽のように込み入った囲碁の手にはどれほどの長い時間がかかるでしょうか。どうにか切り返すまでに。

〔解釈〕◇蕨手　一三五六参照。ここでは「蕨手」(手に似た蕨の新芽)のように込み入った囲碁の手の意も掛けるか。「蕨手」の句例に「蕨手のあははをするか谷の口」(崑山集・一二〇〇)、「百足より蕨手多し鞍馬山」(崑山集・一二二九・長頭丸)などがある。**◇幾劫**　「劫」は非常に長い時間をいう。「劫」の句例に「劫を経し春の山猿智恵ありて」(正章千句・三五一)、「咲くを待つは一劫の間か芥子の花」(崑山集・三四九五・良次)などがある。「劫」には囲碁で互いが交互に相手の石を取り、無限に続きうる形を意味する用法があり、本句の「劫」は仏教用語と囲碁用

語の双方の意味を掛けていると思われる。**◇切返し**　囲碁で不利な形勢から反撃に転じることを指すと思われる。歌例、句例ともに見出せない。

〔作者〕常用由可（下野・宇都宮）。一一句。

1359　**春もややたけ縄になる蕨かな**　　**釈任口**

〔句意〕春も次第に酣（たけなわ）となり、蕨も成長して蕨縄となる季節がやってきたことです。

〔解釈〕◇春もやや　春も次第に、の意。この言い回しを用いた歌例に「春風のやや吹くままに高砂の尾の上に消ゆる花の白雲」（新勅撰集・一〇〇・藤原長方）、「山の端にやや入ぬべき春の日の心ながきも限りこそあれ」（続古今集・一五三七・土御門院）などがある。句例に「春もややけしきととのふ月と梅」（芭蕉発句・七七二）がある。**◇たけ縄**　最も盛んな「酣（たけなわ）」の意。蕨の根の繊維で作った蕨縄があることから、「たけ縄」と記した。歌例に、時代は下るが、「蓋の数もあまたになりにけり酣すぎてめぐる月影」（志濃夫廼舎歌集・四二四）がある。

〔作者〕釋任口（山城・伏見）。七八句。

1360　**山人や黒木にそふるやせ蕨（わらび）**　　**野間政安**

〔句意〕山人は黒い痩せた木のそばに添う痩せた蕨のようです。

〔解釈〕◇山人　山住みの人。歌例に「あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人やたれ」（万葉集・四三一八・舎人親王）、「春雨にうちそぼちつつあしびきの山路行くらむ山人やたれ」（金槐集・五九四）などがある。また、痩せた山人を詠む歌も「山人の老いやせつらん谷川にうつろふ菊の花のしがらみ」（雅世集・六三七）など、僅かだが見える。「山人」の句例は、時代は下るが、「山人や畠打に出る二里三里」（一茶発句・四五八八）がある。**◇黒木**　黒い木のこと。歌例に「あをによし奈良の山なる黒木もて作れる宿はをれどあかぬかも」（新勅撰集・四九三・聖武天皇）、「はたすすき尾花さかふき黒木もてつくれる宿は万代までに」（新拾遺集・六七七・元正天皇）などがある。句例には「木本を炭かと見れば黒木かな」（続境海草・一三五七・安元）、「不思議なは黒木の鳥居小柴垣」（犬子集・二一七七・貞徳）などがある。なお、本句の「黒木」は痩せた粗末な木をイメージさせる。**◇やせ蕨**　痩せた蕨のこと。句例に、後世の作品であるが、「石がちの崖路の末や痩蕨」（葎亭句集・三七八・嘯山）がある。

〔作者〕野間政安（伊勢・朝熊岳）。五六句。

夜咄の折からに

1361　**小夜更けてねらまし物や蕨（わらび）餅**　　**大井重因**

〔句意〕夜噺の時に詠んだ句。夜が更けてきたのでそのまま寝ていてもよかったのに、起き出したので、蕨餅を食べることです。

〔解釈〕◇夜噺　「夜咄も正に長崎や泊りがけ」（時勢粧・一九〇六）のように、長いものさとれる。**◇小夜更けて**　夜が更けて、の意。夜のつれづれに、比叡山の僧たちが餅を食べようとしたとき、稚児たちも食べたかったのであるが、すぐに起きて食べるのもみっともないと思い、しばらく寝たふりをしてから起き出したので、僧たちに笑われたという『宇治拾遺物語』巻第一第十二段の話が本説。また、本句の表現は「やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな」（後拾遺集・六八〇・赤染衛門）に依ったもの。「小夜更けて」の句例に、「仲磨が別れ惜むに小夜更けて」（紅梅千句・四六一・正章）、「問来るは嬉し悲しやさ夜更けて」（時勢粧・七一三一・維舟）などがある。**◇ねらまし物**　寝ていた方がよかったのに、の意。前述の後拾遺歌「寝なましもの」をまねた表現。句例に「休らはでねらまし物を祇園の会」（時勢粧・三二〇・森口心計）がある。**◇蕨餅**　蕨をまぶした餅。句例に「蕨餅うへにぬりたる粉が

はげて」（犬子集・三一四六・貞徳）などがある。

〔作者〕大井重因（武蔵・江戸）。八句。

1362　**立ついふや塵ならぬ名の蕨餅**　　**小沢衆下**

〔句意〕根拠もなく立ってしまったというのでしょうか。塵ほどでもない蕨餅の名が。

〔解釈〕◇**立つ…塵ならぬ名**　「立つ」と「塵ならぬ名」を結んだ歌例に「知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに立つらむ」（古今集・六七六・伊勢）があり、この歌を本歌としたもの。「立ついふや」はこの歌の末尾の「そらに立つらむ」を受けたもの。◇**塵ならぬ名**　塵にも価しない評判、の意。「空にたつ塵ならぬ名の朝霞誰故春の色にいづらん」（洞院摂政家百首・一五・西園寺実氏）など、和歌には見えるが、俳諧では用例が見当たらない表現。

〔作者〕小沢衆下（陸奥・二本松）。一一八句。

1363　**ぜんまいや折りまどはして鈎蕨**　　**山井概武**

〔句意〕ぜんまいを折り取ろうとしたら、形の似た鈎蕨の芽に惑わされてしまったことです。

〔解釈〕◇**ぜんまい**　春の野草の一種。句例に「ぜんまいの手はあひかぎの蕨哉」（続山井・二五五一・無端）、「頼政もいづれ蕨とぜんまいと」（洛陽集・二一三・信徳）などがある。◇**折りまどはして**　折ることを惑わせて。『続山井』の無端の句にあるように、ぜんまいの若芽は鈎型の蕨の芽に似ているので、ぜんまいを折ろうとしたが、誤って鈎蕨を手折ってしまったさまを言う。歌例に「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどわせる白菊の花」（古今集・二七七・凡河内躬恒）があり、本句は「置きまどはせる」を「折りまどはせる」と表現したもの。◇**鈎蕨**　蕨の芽のこと。頭部が鈎のように曲がっているのでこのように言う。句例に「折人の腰やゑひしやうかぎ蕨」（玉海集・三九五・清長）、「山姫の耳掻なれやかぎわらび」（同・四〇一・善入）などがある。

〔作者〕山井概武（陸奥・岩城）。四九句。

1364　**狗脊陸奥渡戸と云ふ所にて**
ぜんまいのはえ出は石の渡戸かな　　**風鈴軒**

〔句意〕陸奥の渡戸という所で詠んだ句。ぜんまいが生え出ているのは、石の綿という茸の多い渡戸の地であることです。

〔解釈〕◇**陸奥渡戸**　現在の福島県いわき市三和町渡戸のこと。◇**ぜんまい**　一三六三参照。◇**はえ出**　植物が芽生えて地中から出てくること。句例に「春雨に生え出づる荻や風の種」（ゆめみ草・三四二・守為）がある。◇**石の渡戸**　「石の綿」を掛ける。「石の綿」は「埃茸」の異名。句例に「前は海入日を洗ふうしろ疵（信章）／松が根まくら石の綿とる（信徳）」（延宝五年「あら何共なや」・七一／七二）がある。なお、ぜんまいには綿があるので、「渡戸」の「綿」はぜんまいの縁語。

〔作者〕風鈴軒（風虎別号）。一〇〇句。

つのぐむ芦
寛文十一年亥十月上旬

1365　**芦の若葉こゆる白鷺や浪頭**　　**松江維舟**

〔句意〕芦の若葉を越えて飛んで行く白鷺の群れは、白いしぶきをあげる波頭に見えることです。

〔解釈〕◇**つのぐむ芦**　「つのぐむ」は、春先に草木の芽が角のように丸まって出始めること。歌例に「三島江につのぐみ渡る芦の根のひとよのほ

どに春めきにけり」（後拾遺集・四二・曽禰好忠）、「三島江や霜もまだひぬ芦の葉につのぐむ程の春風ぞ吹く」（新古今集・二五・久我通光）などがある。**◇寛文十一年**　一六七一年。辛亥。**◇芦の若葉**　生えてから間もない芦の葉のこと。歌例に「夕月夜潮みちくらし難波江の芦の若葉に越ゆる白波」（新古今集・二六・藤原秀能）があり、本歌と見なせる。「芦の若葉に越ゆる」が本句では「白波」ではなく「白鷺」とした。**◇浪頭**　波の先頭のこと。句例に「霧の海に立つ白鷺や波頭」（毛吹草・一五五五・道二）がある。

〔作者〕松江維舟（山城・京）。二〇六句。

〔備考〕時勢粧・二一七六に同一句が見える。

松島の内布袋島を
1366　**芦の若葉袋や通す布袋島**　　**安藤笑草**

〔句意〕松島の内にある布袋島を詠む句。生え始めた芦の若葉が袋を通り抜けているのでしょうか、布袋島の芦は。

〔解釈〕◇松島　宮城県東部、松島湾内の島嶼群。風光明媚なことで知られる。**◇芦の若葉**　一三六五参照。**◇袋や通す**　袋を通したのか、の意。「袋」と「通す」を結んだ句の例に「傘の袋や通す霧の雨」（崑山集・五四一二・弁朗）、「風袋ふり通す霧やつかり穴」（同・五四一三・野沢永吉）などがある。**◇布袋島**　布袋は唐末に実在したとされる僧侶。画題として有名。大きな袋を背負った太鼓腹の姿で描かれることが多い。句例に「子ども寝る蚊屋は布袋の袋哉」（崑山集・三三八六・尚詳）、「笑む花は布袋の顔か袋菊」（続山井・四三七二・克重）などがある。布袋島は仙台の近くの松島にある島のひとつ。『松島眺望集』に「活計なるかな涼風ひらけば布袋島」（同集・二七九・蜘葉）、「月花の行事したまへほていじま」（同・二八〇・栄久）などの句が見える。

〔作者〕安藤笑草（陸奥・岩城）。一三句。

1367　**伊勢の海安濃のつのぐむ芦辺かな**　　**延沢破扇子**

〔句意〕伊勢の海の安濃の津は、芦が芽を出し始めた芦辺であることです。

〔解釈〕◇伊勢の海　現在の三重県志摩半島と愛知県の伊良湖岬に囲まれた内海をいう。歌例に「伊勢の海の浦風さえてふぢかたや安濃の塩竈雪ふりにけり」（夫木抄・一一七二六・寂念）、「伊勢の海安濃の松原まつとてもいひしひかずに波は越えつつ」（同・一三八一三・藤原為家）などがある。句例に「鯨つく伊勢の海づら船見えて」（犬子集・二六〇〇・重頼）、「俄風悲しき伊勢の海士小舟」（時勢粧・七〇〇五・維舟）などがある。**◇安濃のつのぐむ**　現在の三重県津市の古称「安濃の津」を掛ける。つのぐむは、一三六五参照。

〔作者〕延沢破扇子（尾張・熱田）。三五句。

1368　**つのぐむは突きあふ牛のあしべかな**　　**石田九扒**

〔句意〕角と角を組んで突き合う牛ではありませんが、足のあたりに芦が生えはじめた芦辺であることです。

〔解釈〕◇つのぐむ　一三六五参照。「つのぐむ」と「芦」を結ぶ句に「つのぐむや芦の葉にゐる蝸牛」（崑山集・一一六〇・正次）、「つのぐむや難波の三つのあしがなへ」（同・一一六一・友三）、「芦原のつのぐむ種やほこの露」（ゆめみ草・二七三・休安）などがある。**◇突きあふ**　互いに突くこと。句例に「一方に突きあはせたるかいつぶり」（新増犬筑波・五八三五・長頭丸）、「法をきく頭額を突きあはせ」（宗因千句・三六五）などがある。**◇芦辺**　牛の「足」と「芦」を掛ける。

〔作者〕石田九扒（武蔵・江戸）。一句。

尾州津島御芦原にて

1369　**つのぐむは牛頭天王の御芦かな**（哉）

織田夢々

〔句意〕尾州津島の御芦原にて詠んだ句。芽が出ているのは、津島大社の御祭神牛頭天王の御利益を受けたゆかりの芦であることです。

〔解釈〕◇**尾州津島**　現在の愛知県西部に位置する、濃尾平野の木曾川左岸。江戸時代、津島神社の門前町として栄えた。◇**つのぐむ**　一三六五参照。◇**牛頭天王**　京都祇園社（八坂神社）や尾張津島大社の祭神。もと祇園精舎の守護神。句例に「年徳は牛頭天王か今朝の春」（続山井・一二八八・回山）、「牛頭馬頭にまけぬ尾ぼそや頭がち」（続山井・五〇九二・彩雲）などがある。◇**御芦**　芦の丁寧語。牛の縁で「御足」を掛ける。句例に「雁がねの利足は跡にお蘆かな」（崑山集・五一七〇・幸忠）があるが、これは金を意味する「御銭」（あし）。本句では、牛頭天王の御利益の意で用いられているか。

〔作者〕織田夢々（尾張・津馬）。一句。

若布

1370　**とる人は海漫々（かいまん）と若布（わかめ）かな**（哉）

大畔枕肘子

〔句意〕海が広々としたところで貝や若芽をたくさん採っている人は、若い女であることです。

〔解釈〕◇**とる人**　農産物や水産物を採取している人。歌例に「故郷になりにし世よりみの山の玉の葉柏とる人もなし」（夫木抄・八八八〇・源寂法師）がある。句例に「とる人のすねにまきつけへび苺」（塵塚誹諧集・四一八・徳元）、「波の上に雪あり蜆とる人か」（続虚栗・六八六・枳風）などがある。◇**海漫々**　海がはてしなく広いさまをいう。句例に「月や玉海漫々と底びかり」（時勢粧・九三八・笑種）などがある。この句では「貝満々」を掛ける。◇**若布**　「若布」と「若女」を掛ける。句例に「かづきする海士の姿も若女かな」（犬子集・二九五・重勝）、「汁の子もうみ出てよき若女かな」（崑山集・一一六五・長頭丸）などがある。

〔作者〕大畔枕肘子（土佐・国不知）。二句。

1371　**若布（わかめ）もや千尋の浜にひろ斗**

日野好元

〔句意〕若布を長さ千尋の浜でたくさん拾って量ってみましたが、わずか一尋ばかりしかありませんでした。

〔解釈〕◇**千尋の浜**　長さ千尋の浜。歌例に「伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも今は何てふかひあるべき」（後撰集・九二七・藤原敦忠）があり、本歌と見なせる。◇**ひろ斗**　「拾って量る」の意と「わずか一（ひと）尋（ひろ）ばかり」の意を掛ける。「ひろばかり」の歌の例に「ひろばかりさかりてまろとまろ寝せむその総角のしるしありやと」（実方集・一四五）がある。

〔作者〕日野好元（陸奥・二本松）。一八五句。

寛文六年午六月下旬

1372　**和歌めよりよろしきはなし伊勢土産**

加藤文伊

〔句意〕やはり若い女ではなく若芽が一番だとわかりました。伊勢参りの土産の中では。

〔解釈〕◇**寛文六年**　一六六六年。丙午。◇**和歌め**　「和歌」と「若布」、「若女」を掛ける。句例に「しほらしき若布や伊勢の浜そだち」（ゆめみ草・二七六・奇任）などがある。◇**よろしき**　よいこと。句例に「若衆よりよろしきは那智や花の友」（時勢粧・八四七・可九）がある。この句の「若衆」は衆道のことで、男色を賛美している。本句はこれと反対の立場に立つ。

〔作者〕加藤文伊（伊勢・山田）。四句。

〔備考〕『時勢粧』八二四に作者一志文幸として同一句あり。

1373　干すや若布松の木ばしら竹の垣　　吉田聞也

〔句意〕海辺の家で若布干しをしているのでしょうか、松の木の柱や竹の垣に掛けて。

〔解釈〕◇干すや　歌例に「佐保姫の干すや衣の白妙に花咲きにほふ天の香具山」（夫木抄・一一三九・藤原知家）などがある。句例に「海ならで干すやかはらけ桃の酒」（崑山集・一八五五・一貞）などがある。◇松の木ばしら　松の木製の柱のこと。歌例に「風すごき松の木柱竹の垣ゆふべの山ぞ世のうきめなる」（逍遊集・二四〇四・貞徳）がある。本句はこの歌によっている。本句と同じく貞徳の歌を本歌とする句に「生花や松の木柱に竹の筒」（時勢粧・八四二・好元）、「民の春や松の木ばしらに粧竹」（延宝二年歳旦発句集・一七四一・貞清）、「見渡せは松の木柱に竹のへら」（大坂桜千句・一三一・素敬）などがある。

〔作者〕吉田聞也（陸奥・岩城）。八七句。

1374　風を荒め思はぬ潟により藻かな　　松村吟松

〔句意〕風が荒いので、荒布が思はぬ方ではなく潟に集まって、寄藻になったことです。

〔解釈〕◇風を荒め　風が荒いので、の意。文法上は「風をあらみ」が正しいが、海草の一種である「あらめ（荒布）」を掛ける必要上、「あらめ」とした。「風を荒み」の歌例に「色づきしまさきも散りぬ風を荒みあはれ寂しきとやま里かな」（殷富門院大輔集・八七）がある。また、「風を荒み」とほぼおなじ意の「風をいたみ」（風がひどいので）の歌例に「須磨の浦の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」（古今集・七〇八・よみ人しらず）がある。これが本句の本歌と思われる。◇思はぬ潟　右に挙げた『古今集』の「思はぬ方」を「潟」としたもの。思いがけず干潟に集まって、の意。◇より藻　「潟に寄る」と「寄藻」を掛ける。寄藻は浜辺などに流れ寄った藻をいう。歌例に「あまたせく田上側の網代木にせわけの氷魚の寄藻さだめず」（夫木抄・六六九九・藤原信実）、「たぐひけん白浜波の寄藻来ず荒ぶる妹に恋つつぞふる」（同・一一七三〇・読人しらず）などがある。本句よりも前の俳諧の例は見出せない。

〔作者〕松村吟松（武蔵・江戸）。四〇句。

海苔

寛文五年巳十二月中旬

1375　舟人やとつて引きよせ藤戸海苔　　風虎

〔句意〕舟人が源平合戦の舞台になった藤戸の浦で、「藤戸」の盛綱のように海苔を取って引き寄せています。

〔解釈〕◇寛文五年　一六六五年。乙巳。◇舟人　舟に乗って海草や貝などを採取する海士。句例に「舟人のもてる扇や海の月」（犬子集・三三二二・良阿法師）、「舟人はなみなみならぬやつなれや」（貞徳誹諧記・二六七）などがある。◇とつて引きよせ　海苔を採って引き寄せるさま。謡曲「藤戸」を踏まえた表現。源平合戦の時、藤戸の合戦で先陣の功のあった佐々木盛綱は、合戦の折、手柄を立てようと土地の漁師に浅瀬を聞き出したが、他の者にも同じように教えられることを恐れてその男を殺してしまった。「藤戸」には漁師を殺す場面として、「取つて引きよせ二刀さし」とあり、これを踏まえたと思しい句例に「心中づくとつて引よせふた刀」（大坂桜千句・四五九・益翁）などがある。◇藤戸海苔　藤戸は現在の岡山県倉敷市の地名。「藤戸海苔」はこの地に産する海苔。『毛吹草』にも備前国の名物として「藤戸海苔」が見える。「藤戸」の句例に「午の時花の波こせ藤戸石」（崑山集・一四三七・長次）、「盛綱か藤戸を渡る郭公」（同・三〇〇六・安次）などがある。また、「藤戸海苔」の句例に「畳敷

く海もあるかや藤戸海苔」（蕉門名家句集一・除風・一六八）がある。

〔作者〕風虎（陸奥・岩城）。一一二句。

1376　**とりて海士水にや砂を十六島**　　**下河部晒昔**

〔句意〕海苔を取った海士が海水から砂を振るい落としています。十六島で。

〔解釈〕◇**とりて**　海苔を採取すること。「海人」と結んだ歌例に「伊勢の海の海人の島津が鮑玉取りて後もか恋の繁けむ」（万葉・一三二六・読人不知）がある。◇**海士**　海人。魚介、海草などの採取を生業とする者。句例に「かづきする海人の姿も若女かな」（犬子集・二九五・重勝）、「海士人のとるやこのしろかぶと貝」（同・二四四〇・重頼）などがある。◇**水にや砂を**　水で砂を、の意。句例に「積る思ひ水にやならん雪女」（崑山集・七一五八・一井）、「湯をわかし水にや梨（なし）の花の風」（ゆめみ草・四四七・重頼）などがあるが、次に「砂を」が続く例は見出せない。◇**十六島**　うっぷるい。島根県出雲市の地名。「打ち振るひ」を掛ける。『毛吹草』に出雲の名物として「十六島苔」が見える。句例に「袖は露涙の海や十六島」（宗因千句・六一七）、「二の椀に露を打たる十六島」（阿蘭陀丸二・三三六・十賀）などがある。

〔作者〕下河部晒昔（陸奥・二本松）。四三句。

1377　**伊勢海苔やよるしけ波の国津風**　　**風鈴軒**

〔句意〕伊勢海苔を寄せる、繰り返し打ち寄せる波に、土地を守ってくださる伊勢の国の風が吹き渡ります。

〔解釈〕◇**伊勢海苔**　伊勢国で産出する海苔。句例に「伊勢海苔や難波の芦を干し簾」（東日記・二一一・交林）がある。◇**しけ波**　「しけ」は「重け」、繰り返し打ち寄せる波の意。「重け」の歌例に「新しき年のはじめの初春のけふ降る雪のいや重け吉事」（万葉集・四五四〇・大伴家持）がある。◇**国津風**　その土地に吹く風。伊勢という土地が背景にあるので、土地を守ってくれる風の意味を含むであろう。心敬の『十躰和歌』に「あら玉の年は昔に立かへり世ものどやかに四方の海、八の東の国つ風花を匂はすことのはに六くさ七くさつむ人の…」という用例がある。句例に「芦原や豊のちまきの国津風」（仏兄七車・二六一・鬼貫）がある。

〔作者〕松岡風鈴軒（陸奥・岩城）。一〇〇句。

1378　**伊勢海苔は清き渚の玉藻かな**　　**神野忠知**

〔句意〕伊勢海苔は清らかな渚に漂う美しい藻であることです。

〔解釈〕◇**伊勢海苔**　一三七七参照。句例に「伊勢海苔や難波の芦を干し簾」（東日記・二一一・交林）などがある。◇**清き渚**　歌例に「伊勢の海の清き渚はさもあらばあれ我は濁れる水に宿らん」（玉葉集・二六一七・釈教歌）がある。◇**玉藻**　美しい藻のこと。歌例に「浪たたば沖の玉藻も寄りくべく思ふ方より風は吹かなん」（玉葉集・二一〇六・凡河内躬恒）、「満つ潮のからかの島に玉藻かるあままも見えぬ五月雨のころ」（続後撰集・二一二・飛鳥井雅経）などがある。句例に「ひがめくや露の玉藻の前うしろ」（正章千句・八二九）、「玉藻まじりねくたれ月やなだて浦」（松島眺望集・五四九・浮友）などがある。

〔作者〕神野忠知（武蔵・江戸）。五六句。

1379　**勢州桑名にて**
妹恋し伊勢の浜のりとろろ汁　　**松山玖也**

〔句意〕伊勢国桑名にて詠んだ句。恋人のことが恋しく思い出されます。伊勢の浜海苔をかけた「妹」ならぬとろろ芋の汁を食べたので。

〔解釈〕◇**勢州桑名**　伊勢国の桑名のこと。◇**妹恋し**　歌例に「あたら夜

を伊勢の浜荻をりしきて妹恋しらに見つる月かな」（千載集・五〇〇・藤原基俊）があり、本歌と見なせる。「妹」を「芋」と見て「とろろ」と詠んだ。類似した趣向の句例に「今宵ぞと芋恋ひしらに月見かな」（境海草・五二三・盛之）がある。**◇伊勢の浜海苔**　伊勢の浜を題材にした句には、「神風の余慶や荻に伊勢の浜」（時勢粧・七五三六・外村長尚）、「御祓（おはらひ）に伊勢の浜荻声そへて」（談林十百韻・三五・松臼）などがあり、「伊勢の浜荻」を詠む。「浜荻」ならぬ「浜海苔」としたか。「伊勢の浜海苔」の句は見出せない。**◇とろろ汁**　句例に「青柳を花に入れてのとろろ汁」（塵塚誹諧集・九六二・徳元）、「人間の水はとろとろとろろ汁」（二葉集・一九四〇・梅翁）、「とろろ汁高根の深雪解け初めて」（江戸広小路・五八・卜尺）などがある。

〔作者〕松山玖也（摂津・大坂）。四五二句。

1380　**斎（とき）にあふ品川海苔（のり）や東海寺**　　**江口塵言**

〔句意〕お斎にぴったりの品川海苔を海沿いの東海寺でいただいたことです。

〔解釈〕◇斎にあふ　時宜にかなうの意の「時」を掛ける。「斎」は僧家で、食事の称。また、寺で、檀家や信者に供養のために出す食事。この表現を用いた歌例に、「このみゆき千歳かへでも見てしかなかかる山ぶし時にあふべく」（後撰集・一〇九二・素性法師）や、「時にあふ我が身の春にあらねども風まつ花の心地こそすれ」（続後拾集・一二三五・藤原高遠）などがある。また、句例に「お斎にはあはで果つべき今朝の月」（天満千句・一六三・西鬼）、「行く雲の跡さへ白き御斎米」（大坂桜千句・均明・七六七）がある。**◇品川海苔**　現在の東京都品川で採れた海苔。『毛吹草』によれば、品川海苔は浅草海苔とともに江戸の名物。句例に「品川海苔よさてはめづらし／雪汁にすこしあしらふ芝肴（似春）」（誹諧当世男・三五四／三五五）がある。**◇東海寺**　現在の東京都品川にある臨済宗大徳寺派の寺。山号は万松山。句例に「蛇仏けふの干潟や東海寺」（東日記・一二〇・言弓）などがある。

〔作者〕江口塵言（陸奥・二本松）。一〇八句。

1381　**名にし負はば浅草海苔や江戸桜**　　**新山親信**

〔句意〕その名に背かぬというならば、やはり浅草海苔でしょうか。江戸一番の名物は。

〔解釈〕◇名にし負はば　名に背かぬならば、の意。歌例に「名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（古今集・四一一・在原業平）などがある。句例に「名にし負はば物語りせよ伊勢桜」（犬子集・四七八・正信、崑山集・二〇八一に同一句）、「名にし負はば散る花とぢよ樺桜」（続山井・二二八一・為重）、「名にし負はば桜がさねか吉野がみ」（同・二八一八・風鈴軒）などがある。**◇浅草海苔**　『毛吹草』によれば、浅草海苔は品川海苔と並ぶ江戸の名物。句例に「紙草に海苔藻漉くなり浅草川」（東日記・二一〇・工迪）がある。**◇江戸桜**　江戸の桜の意味もあるが、本句では江戸における美しいもの、花やかなもののたとえ。句例に「東路の思ひ出にせん江戸桜」（続山井・二三九八・風鈴軒）、「咲かぬ間や長屋で暮す江戸桜」（誹諧当世男・八九・之方）、「女酒盛醍醐やうつす江戸桜」（江戸蛇之酢・一〇七・露沾）などがある。

〔作者〕新山親信（武蔵・江戸）。一三句。

海辺逍遥して

1382　**いつはあれど春の海辺よ海苔若布（のりわかめ）**　　**座頭拙志**

〔句意〕海辺を歩いて詠んだ句。いつの季節も良さがありますが、春の海辺が一番でしょうか。海苔や若布が取れますので。

〔解釈〕◇**いつはあれど**　いつもそうではあるが特に、の意味。歌例に三条西実隆の「いつはあれど菊の花咲く秋の月神代もきかず住吉の浜」（雪玉集・一二八七）などがある。◇**春の海辺**　「佐保姫の貝ひろふ袖か霞しく春の浜辺は玉もよらなん」（雪玉集・六七七一）があるが、この言い回しの歌例は少ない。『伊勢物語』第六八段に「住吉の浜と詠め」言われ業平が詠んだとする「雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春の海辺に住吉の浜」は春の海辺を褒めた歌であり、本句と近い。

〔作者〕座頭拙志（武蔵・江戸）。五句。

1383　**秋もあれと春の海辺や菊池海苔**（のり）　**斎藤親盛**

〔句意〕秋も良いのですが、やはり春の海辺が一番です。菊池海苔が取れますので。

〔解釈〕◇**秋もあれど**　『伊勢物語』第六八段に「住吉の浜と詠め」言われ業平が詠んだとする「雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春の海辺に住吉の浜」を本歌とした表現。◇**菊池海苔**　「菊池」は現在の熊本県北部、菊池川の上流にある地名。川海苔の「菊池海苔」が名産。本句ではこの「菊池海苔」を海で取れる海苔として扱っている。なお、『毛吹草』に肥後の名物として「菊地海苔」とする。「菊池」の句例に「秋山の原田にさくは菊池かな」（玉海集・二〇九七・豊常）、「酒をたたへ色美しの菊池かな」（山の井・五〇七・正章）などがある。

〔作者〕斎藤親盛（陸奥・二本松）。四十句。

1384　**よる波の花かあらぬか菊池海苔**　**斎藤如酔**

〔句意〕寄せて来る波が運んでいるのは菊の花でしょうか、違うでしょうか。それとも菊池海苔でしょうか。

〔解釈〕◇**よる波**　「花」と結んだ歌の例に、「よる波の花はいつともわかねども萌えて春しる磯の若草」（霞関集・七九・平知清）、「花の上の露とつもらばよる波のかへらぬものか岸の白菊」（雪玉集・四七四六）がある。句例に「よる波の花のなごりか桜貝」（大発句帳・二四五七・宗養）がある。◇**花かあらぬか**　花だろうか違うだろうか、の意。歌例に「秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか波の寄するか」（古今集・二七二・菅原道真）や、この歌を本歌とする「たつ浪の花かあらぬか浦風のふきあげにすめる秋の夜の月」（新千載集・四四〇・洞院公守）などがある。前者の『古今集』もこの句の本歌と見てよい。句例に「白壁か花かあらぬか淀の城」（阿蘭陀丸二・一八五・淡水）、「分し野の花かあらぬか宿の秋」（大発句帳・四八一一・宗養）などがある。◇**菊池海苔**　一三八三参照。

〔作者〕斎藤如酔（陸奥・二本松）。六六句。

陸奥（みちのく）**仏浜といふ所にて**

1385　**海士人も海苔を摘みてや仏浜**　**高嶋述之**

〔句意〕陸奥の仏浜という所で詠んだ句。尼たちが法の道の修行を積むように、海士人たちも海苔の材料を摘むのでしょうね。仏浜という所では。

〔解釈〕◇**仏浜**　現在の福島県双葉郡富岡町仏浜。「あま」と「仏」を結ぶ歌の例に「あまのすむ浜のいはやの仏には浪の花をや折りて寄すらん」（公任集・四四四）がある。◇**海士人**　一三七六参照。歌例に「あしのやの灘のしほ汲む海士人も絞るに袖のいとまなきまで」（続古今集・一〇八九・後鳥羽院）、「海士人もおものの浜のはまづとを月にあけぬと今や急がん」（夫木抄・一一七五四・藤原知家）などがある。句例に「海士人もかづくや烏帽子桜鯛」（崑山集・二四九五・重幸）、「海士人の入江の将棋くれはてて」（鷹筑波・一八二五・重治）などがある。「海士」は「尼」を掛ける。◇**海苔**　「法」を掛ける。また、「摘む」も法の道の修行を「積む」を掛ける。

〔作者〕高嶋述之（陸奥・岩城）。一句。

寛文五年巳十月中旬

1386　**彼も是も一味の海苔や経の紐**　　**佐久間章利**

〔句意〕どれもこれも、御仏の教えが平等であるように、同じ味です。経の紐という海苔は。

〔解釈〕◇**寛文五年**　一六六五年。乙巳。◇**彼も是も**　あれもこれもすべて、の意。歌例に「かれもこれもそのもと末もわきかねてなほ見る袖に月のや宿れる」（千五百番歌合・二八三一・越前）がある。句例は見出せない。◇**一味の海苔**　「一味の御法」から得た言い方。「一味」は、釈迦の御法は衆生に対して平等であるという意味。『梁塵秘抄』七九番歌に「釋迦の御法は唯一つ、一味の雨にぞ似たりける」とある。また、金春禅竹作『定家』にも「一味の御法の雨の滴り、皆潤ひて草木国土、悉皆成仏の機を得ぬれば」とある。「一味」の歌例に「おなじごと一味の雨のふりぬれば草木も人もほとけとぞなる」（続後拾遺・一二八四・源信）、「もろともに一味の雨はかかれども松はみどりに藤はむらさき」（新拾遺集・一四四九・普賢菩薩の歌とされる）がある。また、「一味」の句例に「一味のしただり付けざしにあり」（投杯・五三八・一礼）、「枝々や一味のみのり梅の雨」（崑山集・三八三九・貞利）、「妙薬は一味の雨のつれづれに」（宗因千句・二九）などがある。◇**経の紐**　紅藻類ムカデノリ科の海藻。句例に「花ぶさや鴛のよむ経のひも」（続山井・二六一五・古玄）、「海苔の名も仏や説きし経の紐」（玉海集・九二九・晶月）などがある。

〔作者〕佐久間章利（陸奥・岩城）。五句。

1387　**文殊海苔（のり）つむ橋立や経の島**　　**須田東竹**

〔句意〕文殊が法の道の功徳を積まれた天橋立のそばで文殊海苔を摘み、御経を置かれたという経の島に奉納することです。

〔解釈〕◇**文殊海苔**　文殊は文殊菩薩のこと。天橋立には荒海を鎮めるために文殊菩薩を招いたという説話があり、謡曲『九世戸』の素材となっている。『毛吹草』に丹後の名物として、「切門文殊貝海、松喰とも云ふ、内堅（うちかた）海苔」とあり、本句の「文殊海苔」は天橋立南端の智恩寺文殊堂の近くで産する海苔を指すと思われる。◇**橋立**　天橋立のこと。歌例に「橋立のくらはし川に刈る草のながき日ぐらし涼むころかな」（続古今集・二七四・後鳥羽院）などがある。句例に「橋立や浪の鼓のうちよせて」（犬子集・二五七〇・徳元）、「橋立やゆくへは月の都かな」（大発句帳・五二一八・玄仍）などがある。◇**経の島**　天橋立には、荒海を鎮めるために招かれた文殊菩薩が説法の御経を書き、それを経ケ岬（丹後半島の先端）に置いたという伝説がある。本句の「経の島」は、平清盛が一切経を記した石を埋めて工事をしたという大輪田泊の経島と混同しているのかもしれない。

〔作者〕須田東竹（武蔵・江戸）。六一句。

1388　**摘みとりて今満（いまみ）つるかな文殊海苔**　　**増川如白**

〔句意〕文殊海苔をたくさん摘み取ったので今満ち溢れていることです、人々の罪を取り除く文殊の御法が満ち溢れているように。

〔解釈〕◇**摘みとりて**　海苔の原料を摘み取ること。句例に、「摘みとりて手にすへあぐるたかなかな」（玉海集・一八六・云成）、「水いりな摘みとる後や西煎茶」（毛吹草・四七八・作者不知）などがある。本句では「罪取りて」すなわち「罪を取り除くこと」の意を掛ける。◇**今満つるかな**　今、満潮となるだろう、の意。「満つ」の歌例に「三島江や芦の葉近く満つ塩のほなみにかよふ冬の川風」（夫木抄・一〇七一・土御門院）がある。また、「満」と「法」を結ぶ句例に「のどやかに願ふ天満の法の道」（誹諧独吟集・三一四・令徳）がある。◇**文殊海苔**　一三八七参照。

なお、「海苔」は「法」を掛ける。

〔作者〕増川如白（陸奥・岩城）。一四九句。

1389　**法の舟さして摘まばや文殊海苔**（つ）（のり）　**増川如白**

〔句意〕文殊にあやかって「法の舟」ならぬ海苔の舟を進めて摘みたいものです、文殊海苔を。

〔解釈〕◇**法の舟**　衆生を極楽彼岸に運んでくれる法を舟に譬えた言い方。歌例に「法の舟さしてゆく身ぞもろもろの神も仏もわれをみそなへ」（新古今集・一九二一・智証大師）、「白波をわけてぞわたる法の舟さしけん人の跡を尋ねて」（新千載集・七六六・成尋法師）などがある。句例に「法の舟さしも教へは櫓櫂にて」（時勢粧・四六六二・直重）、「浮びけり御法の舟の苧がら棹」（功用群艦・二七七・松遊）などがある。本句の「法」は「海苔」を掛ける。◇**摘まばや**　摘みたいものだ、の意。「積む」を掛ける。句例に「心あてに摘まばや雪のはつ若菜」（大発句帳・二〇七・紹巴）などがある。

〔作者〕増川如白（陸奥・岩城）。一四九句。

寛文五年巳十二月中旬

1390　**松海苔も種しあればの岩根かな**（哉）　**栗原良重**

〔句意〕松海苔も種があったからこそ、固い岩の根元に生えていることです。

〔解釈〕◇**寛文五年**　一六六五年。乙巳。◇**松海苔**　紅藻類ムカデノリ科の海藻。◇**種しあれば**　種さえあれば、の意。歌例に「種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざらめやも」（古今集・五一二・よみ人しらず）、「種しあれば岩ねの松の同じ枝にさきてぞかかる春の藤波」（延文百首・一九一九・藤原実継）などがある。本句は『古今集』を本歌とする。句例に「種しあれバつむ跡もなほ若菜哉」（大発句帳・二〇八・紹巴）がある。◇**岩根**　岩の根元。句例に「鑓梅の石づきとなる岩根かな」（犬子集・一六九・正直）、「霜は置き水は氷となる岩根かな」（続山井・五二二七・嘉卿）などがある。

〔作者〕栗原良重。後、良斎（武蔵・江戸）。八句。

寛文五年巳十二月中旬

1391　**松海苔も君に引かるる肴かな**（ひ）（さかな）（哉）　**長岡道高**

〔句意〕松海苔も子の日の松ではないが、あなたに引き抜かれて立派な酒の肴になることです。

〔解釈〕◇**寛文五年**　一六六五年。乙巳。◇**松海苔**　一三九〇参照。◇**君に引かるる**　歌例に「今日よりは君に引かるる姫小松いく万代か春にあふべき」（玉葉集・一三・九条兼実）がある。句例は見出せない。子の日に引く「松」と「松海苔」を掛けた表現。◇**肴**　松海苔を食事あるいは飲酒の際の肴にしたのであろう。句例に「梅づけは鶯呑の肴かな」（犬筑波集・七〇）、「もえ出て又芹焼きの肴かな」（犬子集・九八・幽松）、「ももしぎは大宮人の肴かな」（同・一〇八一・徳元）などがある。

〔作者〕長岡道高（陸奥・二本松）。八句。

1392　**陸奥藤間浦にて**（みちのく）　**松海苔やかかる所の藤間浦**（のり）（ふじまうら）　**矢吹嘉品**

〔句意〕陸奥の藤間浦にて詠んだ句。松海苔なのでしょうか、須磨の浦ではなく、このような陸奥の藤間浦にあるのは。

〔解釈〕◇**陸奥藤間浦**　現在の福島県いわき市平藤間の沿岸。◇**松海苔**　一三九〇参照。◇**かかる所の**　このような所の、の意。『源氏物語』「須磨」の「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の

中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、よるよるは、げにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」を典拠としていると思われる。藤間浦を須磨の浦に見立てたのであろう。「かかる所」と「須磨」を結んだ歌例は、「身にぞしむかかる所のよはも又なれぬ旅寝をすまの浦風」（新拾遺集・八三二・贈従三位為子）、「須磨の浦やみぎはに近くよる浪のかかる所は月ぞさやけき」（嘉元百首・二三四三・法印定為）などがある。句例に「あらめ橋かかる所や紅葉鮒」（誹諧当世男・二六四・宗因）、「俎箸にかかる所の秋の月」（宗因七百韻・三三八・梅翁）などがある。

〔作者〕矢吹嘉品（陸奥・岩城）。八九句。

1393　**松海苔や染めぬ緑に春の波**　　**松江宗岷**

〔句意〕松海苔の染めたものではない緑色に、春雨ならぬ春の波が寄せることです。

〔解釈〕◇**松海苔**　一三九〇参照。◇**染めぬ緑**　染めたのではない緑、の意。歌例に「常磐なる山の岩根にむす苔の染めぬ緑に春雨ぞ降る」（新古今集・六六・藤原良経）があり、これが本歌であろう。この言い回しの句例は見出せない。◇**春の波**　歌例に「春の浪のいり江にまよふはつ草のはつかに見えし人ぞ恋しき」（新勅撰集・七七三・藤原家隆）などがある。句例に「水ならぬ岩がき藤や春の波　大発句帳・二二九〇・宗祇）などがある。

〔作者〕松江宗岷（陸奥・岩城）。八九句。

寛文五年巳十二月中旬

1394　**松海苔や友ならなくに浜遊び**　　**高野幽山**

〔句意〕高砂の松を思わせる松海苔は昔からの友というわけではないが、松海苔を摘んで浜で遊ぶとしましょう。

〔解釈〕◇**寛文五年**　一六六五年。乙巳。◇**友ならなくに**　友ではないのに、の意。歌例に「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（古今集・九〇九・藤原興風）、「いかにせん鏡のそこにみづはぐむかげもむかしの友ならなくに」（新後撰集・一四三〇・鴨長明）などがある。前者が本句の本歌と見なせる。句例は見出せない。◇**浜遊び**　歌例は見出せない。句例に「霜置かぬ秋に吹上げの浜遊び」（貞徳誹諧記・三六九）がある。

〔作者〕高野幽山（山城・京）。四四句。

1395　**浜出しやあかぬ別れの鶏冠海苔**　　**白井成重**

〔句意〕船積みの荷が浜に集められ、別れようとしていますが満足できないことです、別れを告げる鶏の鳴き声ならぬ鶏冠海苔がありますので。

〔解釈〕◇**浜出し**　船積みする荷物を浜に運んで集めること。句例に「胴桶に春の肥しの水入れて（之道）／牛雇はるる浜出しの米（史庭）」（藤の実・三〇七／三〇八）、「浜出しの牛に俵を運ぶなり」（続猿蓑・二五・芭蕉）などがある。◇**あかぬ別れ**　十分に満足しないうちに別れること。歌例に「待つ宵に更けゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは」（新古今集・一一九一・小侍従）があり、この歌が本歌であろう。「あかぬ」は「飽かぬ」と「（夜が）明かぬ」を掛ける。「あかぬ…鳥」は夜が明けないうちに別れの時を告げて鳴く鶏ということになるので、「鶏冠」が引き出され、それに浜辺の産物である「海苔」を詠む。句例に「散るかやれあかぬ別れの鳥甲」（ゆめみ草・一七三一・休安）、「君と我あかぬ別れの鳥の汁」（続境海草・一七二〇・一房）などがある。◇**鶏冠海苔**　紅藻類ミリン科の海藻。鮮紅色で鶏のとさかに似ることからいう。『毛吹草』は志摩の名物として「鶏冠海苔」を、『俳諧類舩集』も「志摩」の付合語として「鶏冠海苔」を挙げる。歌例・句例ともに見出せない。

〔作者〕白井成重（武蔵・江戸）。四句。

1396　**浦波（なみ）や色になる尾の鶏冠海苔（のり）**　　**盲目是誰**

〔句意〕鳴尾の浜の浦波は、鶏冠海苔の赤い色になることです。

〔解釈〕◇**浦波**　海岸に打ち寄せる波。歌例に「暮れぬとてとまりをいそぐ浦波に月のみふねぞいでかはりぬる」（玉葉集・一二四五・宗尊親王）、「あふことも今はかたみの浦波に遠ざかり行くあまの釣舟」（続千載集・一四四六・世尊寺経朝）などがある。また、句例に「浦浪や花になりゆく桜海苔」（時勢粧・一六五・正成）、「浦波のよる道くさは若布かな」（続山井・二五七五・尤拙）などがある。◇**色になる**　『伊勢物語』第六一段に在原業平の歌として「染河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」が見える。句例に「そめ顔や色になるてふ今年酒」（時勢粧・一九二七・維舟）、「色になる木々も朱雀のほとりにて」（ゆめみ草・二八六四・保友）などがある。◇**なる尾**　鳴尾。兵庫県西宮市東部の地名。歌の例に「秋さむくなるをのうらの海士人は波かけごろもうたぬ夜もなし」（新千載集・五四九・大江貞重）などがある。句例に「海賊がなるをの沖で脛むくり」（新増犬筑波・八八〇・貞徳）、「寒いづら綿に鳴尾の松の雪」（時勢粧・一九八一・維舟）などがある。「鳴尾」と「色になる」を掛ける。◇**鶏冠海苔**　一三九五参照。

〔作者〕盲目是誰（讃岐・高松）。二句。

1397　**潮時（しほどき）を人には告げよ鶏冠海苔**　　**橋本富長**

〔句意〕汐の満ち引きの時を人に告げなさい。鶏の冠を名に持つ海苔よ。

〔解釈〕◇**潮時**　潮が満ちたり引いたりする時。歌の例に「五月雨は汀まされる浦波の潮時ならぬ塩や満つらん」（柏玉集・五〇四）などがある。句例に「潮時を見るはお月の鏡かな」（崑山集・五六四〇・貞則）、「指引の潮時しかと定まりて」（時勢粧・二六七二・催笑）などがある。◇**人には告げよ**　歌の例に「わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟」（古今集・四〇七・小野篁）があり、この歌が本歌であろう。句例に「月出でぬと人には告げよ海若（あまのじやく）」（時勢粧・二〇八九・貞則）などがある。◇**鶏冠海苔**　一三九五参照。なお、鶏冠は時を告げる鶏の頭にあることから、「告よ」は「鶏」の縁語。

〔作者〕橋本富長（山城・京）。二二一句。

1398　**かけて干（ほ）すや是木に登（のぼ）る鶏冠海苔（海苔）**　　**釈永春**

〔句意〕木に掛けて干しているのでしょうか、「鶏寒うして木に登る」のことわざではないですが、鶏冠海苔が木に登ってみえることですよ。

〔解釈〕◇**かけて干すや**　かけて干しているのだろうか、の意。歌の例に「布引の滝の白糸うちはへてたれ山風ににかけて干すらん」（続後撰集・一〇一四・後鳥羽院）、「春くればまがきの島にかけて干す霞の衣ぬしや誰なる」（夫木抄・四六九・藤原為家）などがある。句例は見出せない。◇**木に登る**　次の「鶏冠」との関連から、物により違う性質に基づいて行動することをいう「鶏寒うして木に登る」ということわざを省略したもの。このことわざに関連して、『新増犬筑波集』に「水鳥の尾の羽の氷今朝とけて／春日に樹よりおるる庭鳥（貞徳）」（一五〇一／一五〇二）があり、「これは鴨寒じて水に入、鶏寒くして木にのぼるといふ事をもつて付たるなり」という注釈が付けられている。また、『毛吹草』の「世話」にも当時のことわざとして挙げられている。句例に「鶏や寒うて屋根にのぼるらん」（犬子集・二九二九、同一句が誹諧独吟集・一一一二に徳元の句として見える）がある。◇**鶏冠海苔**　一三九五参照。

〔作者〕釈永春（陸奥・岩城）　一句。

寛文五年巳十二月中旬

1399　おあしそへて召されよ召されよ百足海苔（のり）　釈加友

〔句意〕足ではなくお金を添えて召し上がれ、召し上がれ、百足海苔を。

〔解釈〕◇寛文五年　一六六五年。乙巳。◇おあし　足の尊敬語。また、貨幣のこと。前者の句例に「金仏の細き御足をさするらん」（炭俵・六一・嵐雪）がある。また、後者の句例に「雁がねの利足は跡にお蘆かな」（崑山集・五一七〇・幸忠）、「年玉はつらぬきとむるおあしかな」（寛文八年歳旦発句集・一二三六・谷風）などがある。◇召されよ召されよ　どうぞ召し上がって下さい、の意。句例に「常々に食養生を召されかし」（宗因千句・八八三）、「御白洲へ御息所や召されけん」（談林十百韻・六三一・正友）などがある。◇百足海苔　紅藻類ムカデノリ科の海藻。「むかで」の句例に「百のおあしを使ひこそすれ／「毘沙門の気にあふ物は蜈蚣（むかで）にて（貞徳）」（犬子集二二一二／二二一三）、「百足より蕨手多しくらま山」（崑山集・一二二九・長頭丸、山の井・一七七に同一作者の同一句が見える）などがある。また、「百足海苔」の句例に「百足海苔栄螺の洞に潜まつてげり」（杉風「常盤屋の句合」・一三・杉風）がある。

〔作者〕釈加友（伊勢・山田）。一六句。

1400　けづく人の刺身（さしみ）にするや百足海苔（むかでのり）　野間政安

〔句意〕産気づいた人が刺身にすることです、酢のきいた百足海苔を。

〔解釈〕◇けづく　産気づく、の意。句例に「けづきぬる孕み女の顔わろし」（貞徳誹諧記・一五九・西武）がある。◇刺身　生のまま切って出す料理。魚介類に限らず加熱調理をせずに出す料理を広くさしみと呼んでおり、江戸初期には酢で味付けしたものが一般的であった（本朝食鑑）。句例に「夕顔やさしみにしても食ひぬらん」（犬子集・一六九三・望一）、「こひねがふ月は淀河にさしみかな」（崑山集・五八五八・貞則）などがある。◇百足海苔　一三九九参照。

〔作者〕野間政安（伊勢・朝熊岳）。五六句。

1401　茶の湯料理　紫海苔（むらさきのり）やふくさ味噌（みそ）　宮内友也

〔句意〕茶の湯料理に出されたのは紫海苔でしょうか、紫の袱紗に見える海苔は袱紗仕立ての味噌汁として饗されることです。

〔解釈〕◇茶の湯料理　茶席で主催者が客をもてなす料理。句例に「吸口を切るも茶の柚の料理かな」（続境海草・清章・一二〇五）がある。また、「料理」と「海苔」を結んだ句に「富士海苔や雲行く客の坊料理」（東日記・二〇八・黄吻）がある。◇紫海苔　浅草海苔とも。紅藻類の海藻。句例に、時代は下るが、「ものの音家つまの蜂の巣だちして（呉水）／「紫海苔の売る春風（界香）」（春秋稿・八六二／八六三）がある。◇ふくさ味噌　茶道具の袱紗が表と裏の重ね合わせになっていることから、二種の味噌を合わせた味噌のこと。赤味噌と白みそを合わせることが多い。他の句例は見出せない。なお、「袱紗」の句例には「大服や袱紗にさばく事始」（万治元年歳旦発句集・七五〇・来安）、「櫛楊枝鼻紙袋ふくさもの」（信徳十百韻・二八三）などがある。

〔作者〕宮内友也（摂津・大坂）。四三句。

1402　さらに又干し敷く海苔の筵（むしろ）かな　斎藤友我

〔句意〕法の筵ではないけれど、また新しい海苔を干すのに筵を敷き並べていることです。

〔解釈〕◇さらに又　ここでは同じことの繰り返しを表す。この言い回しを用いた歌例に「さらに又花ぞ降り敷く鷲の山法の筵の暮がたの空」（千載集・一二四六・藤原俊成）があり、本句はこの歌に依ったもの。句例には「さらに又豆腐ありとや夕時雨」（洛陽集・九七五・自悦）、「さらに又まつや朝日の夕涼み」（大発句帳・三八八八・周桂）、「さらに又秋や植え

しを篠薄」（同・四八五五・宗碩）などがある。**◇干し敷く**　筵の上に海苔を干して敷きならべること。右に挙げた俊成歌の「降り敷く」を踏まえた表現。**◇海苔の筵**　「法の筵」を掛ける。「法の筵」は説教や法会などの際に僧や聴衆が座る筵を掛けた表現。「海苔の筵」は、海苔を干したり、敷きならべたりする筵のこと。歌例に俊成歌のほか、「九重に降り敷く雪は古への法の筵の跡や見ゆらん」（新後撰集・六三七・道玄）などがある。句例には「とらへたるすりが命や助くらん（一幽）／法の筵の人ごみの中」（誹諧独吟集・一三二五／一三二六）、「妙法の法の筵の床がまち」（宗因七百韻・五一二・保俊）、「なつかしきあまの住居や海苔筵」（蕉門名家句集二・涼菟・六〇八）などがある。

〔作者〕斎藤友我（陸奥・二本松）。一〇句。

寛文五年巳十二月中旬

1403　**海の面（おもて）ふすまや春の磯の海苔（のり）**　　**山本武純**

〔句意〕海の表面は衾を張ったように光が満ちていて、春の磯海苔が横たわるように漂っていることです。

〔解釈〕**◇寛文五年**　一六六五年。乙巳。**◇海の面**　海の表面のこと。『源氏物語』「須磨」の三月上巳の祓の日に光源氏たちの住まいが暴風雨に襲われたときの段に、「海の面うらうらとなぎわたりて、行方もしらぬに…海の面は、衾を張りたらむように光り満ちて、雷鳴りひらめく」とあり、本句はこの箇所を本説とする。歌例に「山もなき海の面にたな引きて浪の花にもまがふ白雲」（山家集・九九五）、「荒れくらし波間も見えぬ冬の日の海の面は行く舟もなし」（玉吟集・八三七・藤原家隆）などがある。句例に「海の面の衾やつかば桜のり」（続山井・二五七四・友静）があり、この句も『源氏物語』「須磨」に依る。その他、「海面をはるやふすまの朝霞」（宝蔵・一八二・宗朗）などがある。**◇ふすま**　海の面に「臥す」、つまり横たわっているさまの「臥す」と、「衾」を掛けたもの。「衾」は就寝時に体に掛ける四角形の掛布団。歌例に「寒からし民のわらやを思ふには衾の中の我もはづかし」（風雅集・八八〇・光厳院）などがある。**◇磯の海苔**　磯に生える海苔のこと。歌例、句例ともに見出せないが、「磯」と「海苔」を結んだ句例に「青海苔や潮にさらす磯馴れ松」（雑談集・一四七・尺草）がある。

〔作者〕山本武純（陸奥・岩城）。九句。

松島のうち屏風島を

1404　**波に海苔たたみ寄（よ）せてや屏風島**　　**風虎**

〔句意〕松島の内にある屏風島を詠む句。波の上に漂う海苔はたたみ寄せられているのでしょうか、屏風をたたむと言うだけあって屏風島に。

〔解釈〕**◇松島**　一三六六参照。**◇波に海苔**　波に「乗る」と「海苔」を掛ける。「波」と「海苔」を結んだ句に、「まかなくに波をたねとや桜海苔」（崑山集・二五一四・俊貞）などがある。**◇たたみ寄せてや**　「たたみよす」は物を畳んで寄せること。「たたむ」と「屏風」は縁語。『源氏物語』「野分」の第二段に「御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに」とあり、本句はこれによっていると思われる。句例に「たたみ寄せて波もうつなり水衣」（崑山集・五四二三、毛吹草・一七〇六に作者徳元として同一句）、「金屏をたたみ寄せたる秋の風」（蕉門俳諧集二・となみ山・七〇一・呂風）などがある。**◇屏風島**　松島の島々の一つ。句例に「屏風島みのむし御子（みこ）や冬ごもり」（松島眺望集・二一七・蜘葉）がある。以下、『松島眺望衆』には屏風島を題材にした一連の句が見える。

〔作者〕風虎（陸奥・岩城）。一一二句。

同青島を

1405　**霞（かすみ）して春や青島畳海苔（たたみのり）**

横山重武

〔**句意**〕同じく松島の青島で詠んだ句。霞が出て春になったのでしょうか、春の季節を表す青島では畳のような海苔を干していることです。

〔**解釈**〕◇**青島**　松島湾内の島と思われる。◇**霞して**　霞がかかって、の意。歌例に「霞してお朧月夜と見しものを隔てはてつる五月雨の空」（夫木抄・三〇二五・飛鳥井雅経）、「春ゆけば霞の上に霞して月に果つらし小野の山道」（後鳥羽院御集・一七一）などがある。句例は見出せない。◇**畳海苔**　未詳。畳のような形状の海苔、の意か。歌例、句例ともに見出せない。

〔**作者**〕横山重武（陸奥・岩城）。八句。

1406　湊紙（みなと）春（はる）の海辺に布海苔（ふのり）かな　歌

江口塵言

〔**句意**〕湊紙を貼るのに用いるのは、春の海辺に生える布海苔であることです。

〔**解釈**〕◇**湊紙**　鳥の子紙の一種。和泉国大島郡湊村で作られた。句例に「春の日の鼠色さすや湊紙」（崑山集・一八七九・忠久）、「はりまはす霞や春の湊紙」（続山井・一五七八・常信）、「木枕を波枕とも思ひなせ／「湊紙にてはれる寝所（梅盛）」（鷹筑波・三五八七／三五八八）などがある。なお、「湊」と「海辺」は縁語。◇**春**　湊紙を「貼る」と「春」を掛ける。◇**春の海辺**　歌例に「今日ぞ見る春の海辺の名なりけり住吉の里住吉の浜」（夫木抄・一七一四・藤原定家）、「雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海辺に住吉の浜」（業平集・六七）などがある。句例には、「あたたかな春の海辺の舟遊び」（時勢粧・三三五四・重信）、「くらべみよ春の海べに山桜」（大発句帳・二一九四・紹巴）などがある。◇**布海苔**　紅藻類フノリ科の海藻の総称。煮汁は糊付けに用いられる。『毛吹草』は伊勢の名物として「海蘿（ふのり）」を挙げる。句例に「布海苔の上にのする幣串／祈祷してはや目薬やのみぬらん（貞徳）」（犬子集・二〇四〇／二〇四一）、「詠むれば箔でだみたる君が代ぢや（松意）／布海苔の流苔のむす迄（江雲）」（俳諧虎渓の橋・二二五／二二六）などがある。

〔**作者**〕江口塵言（陸奥・二本松）。一〇八句。

※（よしだ・けんいち／本学非常勤講師）
※（まつもと・あさこ／教養学部地域教養学科・日本文学）